

広島県立美術館

研究紀要

第11号

- 児玉希望と写生帖 永井 明生 1
- 南薫造「美校・航海日記」
—東京美術学校時代（後期）～イギリス到着まで 藤崎 綾 47 (8)
- 圓鋸勝三の初期作品をめぐって—《星羅》にいたるまで 石川 哲子 54 (1)

2008



BULLETIN
OF
HIROSHIMA PREFECTURAL
ART MUSEUM

No.11

2008

HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM
HIROSHIMA JAPAN





口絵1 児玉希望《観音》習作1



口絵2 児玉希望《観音》習作2



口絵3 児玉希望《観音》習作3

児玉希望と写生帖

永井 明生

はじめに

児玉希望（明治三二～昭和四六年 広島県安芸高田市高宮町出身）がその生涯に制作した日本画の作品群を俯瞰すると、一人の画家が生み出したとはにわかに信じがたいようなその多彩さに驚かされる。例えば、昭和初期に集中して描かれた、圧倒的な存在感で見る者に迫りくる風景画の大作。昭和一〇年前後に試みられた、繊細な筆致で毛並の一本一本さえも見事に描き切った一連の動物画。さらに昭和一五年前後の歴史人物画への挑戦。昭和二〇年代に推し進められた洋画的表現の模索。約一年間の滞欧（昭和三二～三三年）を経て、帰国後には抽象表現の領域をも涉猟し、そのいずれもが高い完成度を示した。^①

画家の初期から晩年までの作品の変遷をたどっていくと、その画業において一貫して意欲を注ぎ続けたものとして水墨画の制作を挙げることができ。それらの作品は、伝統的な描法に則ったものもあれば、実験的な抽象表現を用いたものもあり、希望芸術を語る上で外すことのできない領域と言える。^②

一方で、これらの作品の制作に先立って、数多くの油絵の習作が描かれ

ていることについても、以前別の小論で指摘したことがある。その際には、昭和三〇年代に制作された3点の日本画作品（《踊》、《涅槃》、《瀾》）を例に挙げ、その構想段階において制作された油絵や素描に関して検討を重ねて、色彩の選択や形態の把握などがいかになされていったかについて論を展開した。^③

その小論を執筆した当時、現存する複数の油絵とともに、数多くの写生帖についても、所蔵家の協力のもと調査をさせていただいたが、今回改めて、その際には実見できなかったものや新出のものなども含め、計一二〇冊の写生帖を調査する機会を得た。調査日は、平成一九年二月四日、九日、一六日、一八日、二二日の五日間である。

本論においては、その調査の結果をふまえて、写生帖の概要を一覧表にまとめ、幅広い作風を示す日本画作品を制作する前段階としてなされた数々の模索や実験の軌跡を跡づけることで、今後の児玉希望研究の一助としたい。

写生帖一覧

一二〇冊分の写生帖一覧については、別表のとおりである。図版頁数の

「数え方については、文字によるメモ書きの類は除き、その頁に何らかの図柄が描き込んであれば「1」とした（例えば、一頁に植物と動物など、複数の対象が表されている場合でも「1」とカウントしている）。見開きの二頁分を使って大きく図柄を描き込んでいる場合については、描かれた対象が一つのものであっても、便宜的に「2」と数えている。

これらの中には、児玉希望の代表作として語られることの多い《枯野》（昭和二年／別表 No 3 No 15）（図 1～17）、《盛秋》（昭和三年／No 31 No 32）をはじめ、《猿猴捉月》（昭和八年／別表 No 60 No 97）（図 18～21）、《降魔》（昭和四四年／別表 No 80 No 81）（図 22～24）といった本画の習作として描かれたものが多く見出される。習作から本画にいたるその過程が示されている点で大変貴重なものであるが、もちろん、その他多くの写生画や構想画のそれぞれについても、画家の真摯な研究の軌跡を物語る非常に興味深い資料となっている。

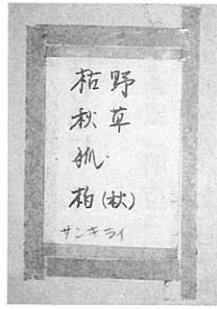


図 1

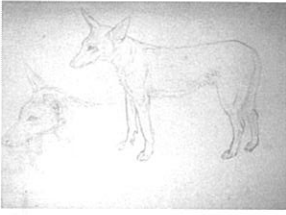


図 2



図 3



図 4



図 5

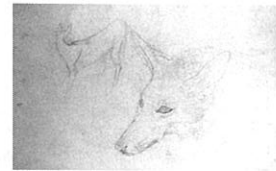


図 6



図 7



図 8



図 9



図 10



図 11



図 12



図 13



図 14

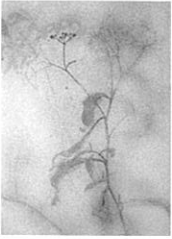


図 15

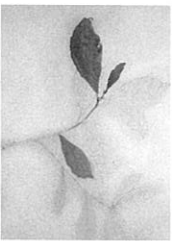


図 16



図 17



図18



図19



図20



図21



図22



図23



図24

《観音》完成までの軌跡

ではここで、今回実見した写生帖のなかでも、極めて明快に本画の制作にいたるまでに練られた構想の展開が示されているものを、一例として紹介したい。昭和四二年の第一〇回新日展に出品された《観音》(図25)の習作として描かれた写生帖(別表No18)である。

《観音》は、仏画への関心を示した晩年の希望が、法隆寺夢殿の救世観音をモチーフに描いた作品である。金箔による光背や衣紋、金紙を型に切り抜いて貼りつけた宝冠など、斬新な技法を用いている。ところどころ金砂子も散らされた朦朧とした背景から浮かびあがる観世音菩薩は、生身の人間のようにもあり、暈された身体の輪郭線や赤色の瞳が、さらに幻想的

な雰囲気を高めている。

この写生帖の寸法は、四二、〇×三三、〇cm。題箋はなく、計一八頁で構成されている。希望自身によるメモ書きから明らかとなり、昭和四二年四月五日から同一三日までにおこなわれた写生をもとに、構想が練られたものである。

一頁目には、筆に墨(あるいはペン・黒インク)で、観音の宝珠のみが描かれている。

二頁目は、観音像の全身が黄色系の淡い彩色で表現されている。図柄は用紙の左右をトリミングして、四二、〇×約一七、八cmの寸法で描かれている。(口絵1・図26)

三頁目は、観音の上半身が描かれる。用紙のトリミングはない。筆(あるいはペン)に淡彩で、うすい茶系あるいは灰色系の彩色が施されている。口唇部には淡紅色も用いている。(図27)



図25

四頁目は、用紙のトリミングはなく、顔と首のみを筆（あるいはペン）で表す。口唇部は赤く、髪は青灰色である。（図28）

五頁目は、再び観音の全体像。図柄は用紙の左右をトリミングして、四二、〇×約一八、〇cmの寸法で描いている。筆（あるいはペン）で対象を描写し、その上から彩色（背景を濃紺、髪も紺色、その他の箇所は金泥）を施している。（図29）

六頁目は、観音の全体像で、筆（あるいはペン）に淡彩である。三頁目の表現に近い。用紙のトリミングはない。（図30）

七頁目は、四頁目と同様、筆（あるいはペン）で顔と首の部分のみを描いている。顔はうすい茶系で彩色され、目の白眼部はまるで充血をしているようにうすい赤で表されている。用紙のトリミングはない。（図31）

八頁目は、筆（あるいはペン）のみで、宝珠が描かれる。用紙のトリミングはない。一頁目と同様の表現である。

九頁目は、筆（あるいはペン）のみで、観音の顔のアップが描かれている。用紙のトリミングはない。（図32）

一〇頁目は、観音の全体像で、筆（あるいはペン）に淡彩の表現である。用紙のトリミングはなく、全体的にうすい茶系の彩色が施されている。胸部や宝冠などは青灰色である。（図33）

一一頁から一七頁までは、観音の図柄の各種バリエーションが展開され



図26



図27



図28



図38



図39



図40



図35



図36



図37



図32



図33



図34



図29



図30



図31

ていく。まず一頁目は、用紙の左右をトリミングし、四二、〇×約二〇、五cmの寸法で描いている。背景は明るい青で処理され、髪は紺色である。宝冠や髪飾り、台座、服などは、発色の異なる二種の金泥で表現されている。顔や手足、胸部には白い塗り残しが見られ、目や口は赤く彩色されている。(口絵2・図34)

一二頁目は、用紙の左右がトリミングされ、図柄は四二、〇×約二〇、六cmである。背景は黒く処理されているが、下の部分は金泥のグラデーショで表現されている。顔や胸部、手足には銀泥を用いている。宝冠や髪飾りは金泥で、髪は紺色で彩色されている。目や口は赤い。(図35)

一三頁目は、用紙の左右がトリミングされ、図柄は四二、〇×約二二、〇cmである。背景は濃紺(下方は金泥のグラデーション)である。一二頁目の表現とかなり類似している。(図36)

一四頁目は、法隆寺の百済観音が真横から描かれている。用紙の左右がトリミングされ、図柄は四二、〇×約一五、二cmである。背景は淡い緑色系の色で表現されており、観音像自体は筆(あるいはペン)のみによる描写で、彩色されていない。(図37)

一五頁目は、百済観音と同寺の夢違観音とを合体させたような像で、やや右側からななめに見たアングルで描かれている。用紙の左右がトリミングされ、図柄は四二、〇×約一五、六cmである。背景は墨色のグラデーショで表現されている。観音像自体は筆(あるいはペン)のみによる描写で、彩色されていないが、光背にはうすく墨が施されている。(図38)

一六頁目は、用紙の左右がトリミングされ、図柄は四二、〇×約一九、八cmである。背景は青灰色で、その上から金泥を塗り込み、さらにその上から金砂子を施している。顔や首、手足は銀泥で表している。目と口はか

すかに赤く、髪は紺色である。(図39)

一七頁目は、用紙の左右がトリミングされ、図柄は四二、〇×約一九、八cmである。背景は一六頁目よりも明るい紺色。その上から金泥と、さらに赤色系の顔料でまだらに背景が処理され、観音が浮かび上がって見えるような効果を生んでいる。宝珠の焰を鮮やかな赤で表し、目と口は一六頁目と同様かすかに赤い。(口絵3・図40)

最後の一八頁目は、四方の枠で囲んだ小さな構想画(左側二、六×六、二cm、右側一、〇×六、〇cm)が描かれている。

法隆寺の秘仏を写生することから始め、その作業を通して少しずつさまざまな表現を模索していき、自由に想像の翼を広げながら、それを写生帖の中で展開させていく。児玉希望の創作における流儀とも言うべきものが垣間見られるようである。

なお、この写生帖とは別に、《観音》の右下図も三点現存しており、それらも実見することができた。三枚重ねて丸めて保存しており、そのうちの一点に「決定」の文字が書かれていた。宝珠の部分は右下図とは違う紙に描かれて(別に構想がなされて)いて、それを右下図に重ねるようにしてある。腕や髪飾りの部分も、別途構想して右下図の紙に貼り付けてある。型紙を貼り付けるといって斬新な表現に到るまでの構想が、この右下図の段階で計画されたことを示しており、大変興味深い。

新発見など

これらの写生帖を通覧していくと気づくことであるが、児玉希望はその創作に際して、抱いた感興を即座に絵筆に託して対象を描き、のちにそれらを分類・整理するため、時に写生帖の頁を切り離して別の写生帖に挟み

込む、ということをしている。すなわち、植物なら植物、溪流なら溪流、というように、あとで同様のモチーフを集めて、そののちに写生帖の表紙に題箋を付す、という再構成の作業をおこなった形跡が見受けられるのである。前述した《観音》関連の写生帖のように、当初から整然と組み立てられ整理されたものもある一方で、制作年が大幅に前後したり、入り混じっている写生帖も複数ある、ということには注意が必要である。

希望はおそらく、これらの写生帖を、描いた当初だけではなく、その後何年も何十年も、本画を描く際に参照する重要な資料として考えていたのであろう。すなわち、本画制作の際折にふれて写生帖をひもとき、再度それらを見つめることで、必要なモチーフについて記憶を呼び戻したり、あるいは形態を描写する際の参考にしたり、ということを行っていたと思われるのである。

そのことを考えあわせると、写生帖を分解したり、同じモチーフのものを切り貼りして整理したりという作業は、画家にとつてはごく自然な、必要な作業であった、とも考えられるのである。現時点でそれを調査研究する側からすれば、各写生帖が制作された年の特定が困難になるといった面は生じるにしろ、そういった問題を越えたところで、これらの写生帖に画家の創作の秘密に迫るための貴重な情報が含まれている、という点にこそ着目すべきであろう。

新知見という言葉は大袈裟かもしれないが、例えば一冊の写生帖（別表No.38）には、不染鉄（鉄二）によるかなり細かく描き込まれた素描作品と文章が含まれていた（図41〜43）。これは希望宅を訪れた不染が興に乗って描いたものと思われる。希望の周辺、新たな交友関係の発見、という意味で、大変興味深かった箇所の一例である。⁴



図41



図43

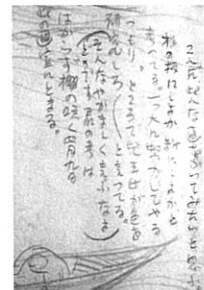


図42

おわりに

今後の児玉希望研究の課題としては、まず、未見の下図類や書簡類等、各種資料の調査が挙げられる。また、所在不明となっている作品（特に展覧会出品作）の追跡も、引き続き情報を集めながら進めていき、可能な限り明らかにしていきたい。さらに、昭和三年から三三年にかけてのイタリアを中心としたヨーロッパ滞在時（この時期には大規模な個展をイタリヤやフランスで開催し、水墨画の佳作を数多く生み出した非常に意義深い時期であった）の足跡をより詳細に跡づけていくことも、今後の重要な課題であろうと考えている。

いずれにしても、今回紹介してきた数々の本画の制作に先立って描かれた写生画や構想画については、今後より詳細に分析していくことで、希望の制作態度や考え方について新しい見解を示すことができるのではないかと考えている。今回調査をおこなった二二〇冊の写生帖は、そういった意

味で、大変貴重な一級の資料であると言つてよいであろう。

この小論は、今回調査をおこなつた写生帖の各々を個別に深く分析していく前段階における、経過報告的な要素が強いことは否めないが、自身が児玉希望の研究をさらに進めていくための架け橋となり、また他の研究者によつて活用可能な参考資料となれば、と考えている。

【註】

(1) 平成二年一月三日～平成三年一月四日、広島県立美術館において、特別展「近代日本画壇の巨匠・児玉希望―その飽くなき探求―」を開催。同展においては、当時新たに所在の判明した複数の大作をはじめ、画家の初期から晩年までの代表作を含む計一二点によつて、幅広い希望芸術の全容が紹介された。

(2) 拙稿「児玉希望と水墨画（試論）」『広島県立美術館研究紀要 第八号』（平成一七年三月三十一日発行）において概説。

(3) 拙稿「児玉希望と油絵」『広島県立美術館研究紀要 第六号』（平成一四年三月二十七日発行）。

(4) 不染鉄（ふせん てつ）は、明治二十四年東京生まれ。鉄一とも号する。異色の日本画家として知られる。これまでに開催された回顧展としては、「純情の画家 不染鉄遺作展」（平成八年四月二十七日～五月二十六日、於奈良県立美術館）、「没後三〇年 不染鉄遺作展 忘れられた画家シリーズ31」（平成一九年四月三日～四月二十九日、於星野画廊）などが挙げられる。

【付記】 本稿は、広島芸術学会・第八一回例会（平成一九年二月八日、於広島県立美術館講堂）における口頭発表をもとにまとめたものです。

また、本稿をなすにあたり、児玉雄氏に多大なご協力、ご教示を賜りました。末筆ながらここに記し、心よりお礼申し上げます。

（ながいあきお／当館学芸員）

別表 児玉希望 写生帖一覧

No	寸法(縦×横cm)	図版頁数	題箋	題箋の表記	備考
1	54.2×39.0cm	72	有	秋草 ハナショーブ 菊 ケシ シャクヤク オミナイシ【オミナエシの誤記】 キンセンカ リュウキュウエビネ グラジオラス ガーベラ キンギョソウ 鳥(モズ・アトリ) モミジ 雪景 信州 サクラ	第3図に「22.8.18 於御代田」と表記 第13図に「23.11.4」と表記 第68, 69図に「21.4.13 妙義裏ニテ寫ス」と表記
2	54.2×39.0cm	37	無		第28, 29図に銀鷄 第30図に「25.8.26」と表記(ヒマワリ) 第31図に「8.27」と表記(ヒマワリ) 第37図に「25.6.24」と表記(薔薇) その他、芥子、桃、アヤメなど
3	45.2×30.0cm	55	有	さぎ つる しゃぼ【しゃもの誤記】 牡丹 狐の顔 あやめ 柳	第51, 52図に狐の顔→《枯野》(昭和11年)の習作か
4	45.2×30.0cm	23	有	鶉 百日草 ふき	鶉のスケッチ多数→《鶉》(昭和14年)の習作か
5	44.8×30.0cm	86	有	牡丹 バラ シャモ 赤魚 カモ つる	第66, 73, 74図→《大川端》(昭和30年頃)の習作か 第5図に花瓶(第75図にも) 第82図に「5.1. 松山牡丹園」と表記
6	44.8×30.0cm	66	有	ツツジ サクラ 泰山木 麦 キキョウ 大豆 砂糖芋 ふようの花 藤の花 ケシ 洋蘭 椿	第1～38図に植物 第39～47図に壺 第56, 57図→《室内》(昭和27年)の習作か
7	44.8×30.0cm	98	有	ぼたん(特に葉の参考に良し)	第19, 32～34図に牡丹 第35～38図に男性人物図 第42～47図→《七面鳥》(昭和13年)の習作か
8	40.8×32.0cm	20	有	サクラ エドナーデ ダリヤ グラジオラス	
9	40.8×32.0cm	30	有	アザミ 赤鯉 ストレンチャ 泰山木 ネリネ アンスリウム	
10	40.8×32.0cm	20	有	赤鯉 モクレン ハナショーブ スイセン 海魚 いか	海魚はサバ、キス、コノシロ
11	40.8×32.0cm	44	無		第5図に「34.6.1」と表記 その他日付記載多数(～「34.10.14」)
12	40.8×32.0cm	27	無		第14図に「37.9.16」と表記 第15図に「37.8.31」と表記
13	41.8×29.6cm	47	無		題箋のとれた形跡あり ススキ、萩、タケノコなど
14	41.8×29.6cm	82	有	菜の花 春楽 矢車草 ツツジ スミレ 山ぶき タンポポ アヤメ シャクヤク エンドウ豆 レンゲ かわらナデシコ	第1図に「四月二十三日」の表記あり
15	41.8×29.6cm	88	有	枯野 秋草 狐 柏(秋) サンキライ	第59～88図に狐 スケッチブック全体が《枯野》(昭和11年)の習作
16	41.2×33.0cm	6	無		第1～5図に観音、波 第6図も観音(横向き) スケッチブックの中ほどは無記入(白紙)
17	41.2×33.0cm	12	無		不動明王か
18	41.2×33.0cm	18	無		観音像(法隆寺における制作)
19	41.2×33.0cm	10	無		第1～3図に男性の顔 第4～7図にインド女性 第8～10図に百合の花

No	寸法(縦×横cm)	図版頁数	題箋	題箋の表記	備考
20	36.6×27.6cm	62	有	りんごの花 シャクヤク 樹木	
21	36.2×26.8cm	42	無		枇杷、百合、竹、岩、滝など 《群貝》(昭和4年)頃の制作か ひまわりや布は緻密なデッサン
22	37.3×28.2cm	59	有	波 岩	
23	37.2×28.1cm	48	有	ひまわり 林 菊 布デッサン 杉の花 桜 シャクヤク	奥入瀬関連か
24	37.2×28.1cm	40	無		題箋のとれた形跡あり
25	37.2×28.4cm	23	有	鳥(セキレイ)(ツグミ) 毛糸 草むら 枯竹	
26	36.6×27.4cm	57	有	溪流 雪景 藤の花 鯉 梅の実 ざくろ	
27	33.2×24.6cm	27	有	ストレンチャ アマリリス スイセン パラ 君子蘭 洋蘭 ケシ サボテン花	
28	35.9×25.4cm	18	有	龍須【頭の誤記か】の滝 湯元湖 其 他 風景	
29	37.3×26.8cm	31	有	ぐみの実 ほをずき いちじく 桃の実 栗	
30	36.6×27.8cm	62	有	立木 ぶどう もみじ 稲 山ぶき 鈴蘭 きじ 海棠	
31	36.4×26.8cm	38	有	溪流 岩肌	奥入瀬関連か
32	36.6×27.4cm	43	有	風景(山) 樹木(松)(枯) 草	第4図に《盛秋》(昭和3年)の習作(淡彩)
33	37.2×28.4cm	31	有	風景(山) 波 日本橋	水墨山水図の習作と思われる淡彩スケッチもあり
34	37.0×27.8cm	38	有	屏風 花 アンセリウム	「屏風」の部分に関しては、狩野派の描写の訓練か
35	37.2×28.0cm	80	有	松 モクレン ザクロ アザミ	
36	27.6×37.0cm	23	有	風景(山林) 樹木	
37	27.6×36.8cm	36	有	山 木々 さくら つつじ いたどり	
38	27.6×36.8cm	87	有	秋草 枯葉 溪流	第64図：不染鐵二による素描と文章→画家の交友関係を跡づける資料として貴重
39	24.8×33.9cm	22	有	枯野大杉 風景(犬山城 松島 日劇 前 路地 松島海岸 富士山)	第3図「30.9.16山中」 第8,9図に宮島 渡欧直前の時期のスケッチ
40	22.8×29.8cm	32	無		鳥 風景(点景として人物) 桜
41	22.6×29.4cm	21	無		箱根富士写生 花木
42	22.1×29.6cm	11	無		植物
43	22.1×29.8cm	63	無		妙義山麓 滝 木曾嶽 植物など
44	21.3×30.0cm	73	無		天橋立 三段峡など
45	22.0×29.6cm	51	無		溪流 植物 岩 流水など 第51図に《飛泉涼々》(昭和6年)の初期段階習作(構想)あり
46	21.2×30.0cm	41	無		人物 植物 風景(筑波山など) 鳥
47	21.4×30.1cm	64	無		溪谷 雪の松島など
48	21.8×29.8cm	45	無		妙義 松島など
49	22.8×30.2cm	44	無		第1,2図「昭和十一年五月十八日 金剛山観音連峯」
50	21.2×30.2cm	38	無		巖島神社 伊豆 牛 抽象など

No	寸法(縦×横cm)	図版頁数	題箋	題箋の表記	備考
51	22.0×29.8cm	45	無		男体山 竜頭ノ滝など
52	22.8×30.2cm	45	無		京都市内 高句麗壁画など
53	22.0×29.6cm	63	無		植物 馬 風景(信州?)
54	22.6×29.6cm	32	無		鳥 植物など
55	22.0×29.8cm	20	無		植物 木
56	22.6×29.6cm	20	無		風景 植物
57	22.0×29.8cm	40	無		仏像など
58	29.6×22.6cm	78	無		風景 波 植物
59	29.6×22.8cm	59	無		溪流 植物など
60	29.6×22.6cm	78	無		第19～24図に《猿猴捉月》(昭和8年)の習作など
61	27.4×18.4cm	68	無		風景 点景の人物 紅葉
62	22.1×28.0cm	18	無		漁船 鶴?
63	20.4×27.0cm	25	無		花 人物 壺(中国・宋時代)
64	21.9×29.8cm	45	有	洋蘭 チューリップ オダラトシボ 藤の花 イチゴ ビワ バラ エビ 桜 魚(アユ、飛魚)	花のカラー写真添付
65	28.6×23.2cm	36	有	ハナショープ カキツバタ バラ(アリモーン種)	
66	26.7×19.6cm	25	無		滝 鹿 風景 植物 虹など
67	29.5×22.6cm	73	無		植物 海藻 波 カニ ヤドカリなど
68	29.4×22.5cm	79	無		寺 滝 イソギンチャク 海 波など
69	27.9×23.2cm	28	無		さくら きゅうり
70	24.5×29.1cm	55	無		波 溪流 岩
71	21.8×28.0cm	16	有	鳴門習作	
72	21.8×28.2cm	18	有	鳴門習作 踊素描 秩父○○【判読できず】	屏風の構想3点(溪流)添付
73	21.8×28.4cm	19	有	犬吠燈台	
74	27.9×21.9cm	16	無		《涅槃》(昭和38年)の習作
75	20.4×29.4cm	30	無		《不動》(昭和41年)の習作 その他風景も
76	28.8×20.8cm	46	無		長野 千曲川 桜の風景も
77	28.8×20.8cm	51	無		滝 風景など
78	28.8×20.7cm	45	無		風景 溪流 海 植物など
79	21.3×29.4cm	20	無		曙富士 大瀬崎 宮島など
80	21.3×29.4cm	31	無		宮島 姫路城など 《降魔》(昭和44年)習作も
81	21.3×29.4cm	45	無		《降魔》(昭和44年)の構想あり 人骨の研究も
82	21.3×29.4cm	17	無		風景 流水 花 宇治平等院も
83	20.4×27.6cm	18	有	風景 長浜 桜島	第3図→《春のバンガロー》(昭和29年)の習作か
84	20.4×27.6cm	21	有	風景 白浜 村 白塚 オコゼ(魚) カニ	

No	寸法(縦×横cm)	図版頁数	題箋	題箋の表記	備 考
85	28.9×20.4cm	61	無		風景 金魚 花 枯葉 魚 貝
86	29.0×20.4cm	72	無		風景 溪流 桜など
87	26.8×19.8cm	60	有	牛	人物や鹿も
88	26.8×19.8cm	46	有	少年の顔 鹿	少年の手や足も 鹿 植物
89	26.8×19.8cm	61	有	牛・枝 鹿・樹木 イタドリ ユリの木 フキ	
90	26.8×19.8cm	35	無		虹 松の木など
91	18.4×25.3cm	4	無		第2図：「26.11.23 苫小牧」
92	18.7×25.6cm	32	無		小諸ほか風景 陶器スケッチ
93	18.7×25.6cm	21	有	古陶器 花瓶 山鳥	
94	25.6×17.8cm	17	有	風景 (ペン)	青いペンで表現 《烟雨》(昭和29年)の習作あり
95	25.8×17.8cm	38	有	房州(太海) 洋蘭	
96	17.8×28.4cm	58	無		風景
97	17.8×28.4cm	25	無		《猿猴捉月》(昭和8年)の構想
98	17.8×28.4cm	18	無		「漢二十四孝陰刻畫像二枚」の模写あり
99	20.5×28.1cm	27	無		《大川端》(昭和30年頃)の構想あり
100	26.6×20.4cm	27	無		少年 牛 秋二作など
101	24.1×16.2cm	18	無		人物 屏風の構想(3枚)添付
102	14.0×21.4cm	26	無		風景 イカ 鯉など
103	14.0×21.4cm	59	無		風景 植物 雛
104	14.0×21.4cm	74	無		植物など
105	14.0×21.4cm	66	無		風景(漁村、海岸) 波など
106	14.0×21.4cm	62	無		風景 植物
107	14.0×21.4cm	36	無		バラ かんざし くし
108	14.0×22.1cm	77	無		風景 植物
109	14.0×22.1cm	59	無		風景 鳥
110	14.6×22.6cm	24	無		風景 鳥
111	14.2×20.2cm	56	無		風景 植物 人物
112	14.2×20.2cm	3	無		風景 鮎
113	14.8×22.6cm	35	無		風景 鶴 鷹 猫
114	14.6×21.2cm	19	無		第1図：「浅間 30.10.22」など
115	14.6×21.2cm	12	無		青いペンと墨使用
116	14.6×21.2cm	17	無		
117	14.6×21.0cm	44	無		波 風景 人物の抽象化
118	14.2×22.4cm	23	無		キツネ 鳥も
119	11.0×17.0cm	57	無		風景 植物 岩など
120	11.4×18.1cm	25	無		風景 植物 木 人物など

広島県立美術館 研究紀要 第11号
BULLETIN OF HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM No.11

発行日 2008年3月31日

編集・発行 広島県立美術館

Hiroshima Prefectural Art Museum

〒730-0014 広島市中区上幟町2-22

2-22 kaminobori-cho Naka-ku Hiroshima City 730-0014 JAPAN

Tel.082-221-6246 Fax.082-223-1444

印刷 株式会社 タカトープ rintメディア

〒730-0052 広島市中区千田町3丁目2-30

Tel.082-244-1110